

## 消費されるインドの神霊パフォーマンス—— 文化経済学的アプローチの試み

大阪大学大学院生 竹村 嘉晃

本発表は、経済発展の著しい現代インド社会において隆盛する神霊パフォーマンスに焦点をあて、社会・宗教的文脈や芸能学的観念に加えて、文化経済学的視点を導入することで、神霊パフォーマンスを経済的価値と文化的価値の両面を併せ持つ「文化資本」として捉えなおす。そして、「神霊パフォーマンスを奉納する」という身体文化の大衆的消費活動が、経済の新たな活性化と実践者たちの社会的地位や伝承の変化をもたらしている現況を明らかにする。

南インド・ケーララ州の北部地域では、ローカルなヒンドゥー社会を中心にテイヤムと呼ばれる神霊パフォーマンスが行われている。テイヤムは、一年に一度、乾期にあたる10月下旬から6月初旬にかけて、カースト寺院や祠のある屋敷の敷地内において、夜を徹して行われる儀礼である。指定カーストの人々が自らの身体に神霊を降臨させることで顕現するテイヤムは、顔には複雑な化粧を施し、赤を基調とする装束をまとして人々の前に姿を現す。その後、テイヤムは、祭文や舞踊的身体技法を含む身体パフォーマンスを繰り広げた後、参拝者に祝福と託宣を与える。

このテイヤム儀礼で祀られている神霊の中でも、ここ数十年、ムッタッパンと呼ばれる神霊の儀礼奉納がとりわけ盛んに行われるようになっていく。そして、ムッタッパン信仰の隆盛の背景には、インド経済の発展や中東湾岸諸国への出稼ぎ労働者たちによる送金に関係している。

ムッタッパンは、他のテイヤムとは異なり、特定の寺院や祠だけで祀られた神霊ではないため、いつでも誰でも儀礼を奉納することができる。それは、個人宅での儀礼奉納が可能であることを意味し、近年ではその依頼が著しく増加している。また、ムンバイやデリーといった州外の都市部に住むケーララ出身者コミュニティの間では、ムッタッパンを祀った祠を建設する動きが活発化し、その信仰は州外を越えて浸透しつつある。

観念的な他のヒンドゥーの神々とは異なり、ムッタッパンは、他のテイヤムと同様、指定カーストの人々によって具現化される、いわば「顕現する神」である。そのため、地元の人々は、目の前に現れた神霊に対して個人的な悩みごとを相談し、アドバイスをもらおうとする。日常の些細な悩み事から新築祝いや結婚相談、不妊や安産祈願、就職や進学相談、中東湾岸諸国へ出稼ぎに行く家族の安全祈願など、現世利益を求めて人々は

様々な相談をもちかけ、ムッタッパンはそれらに対して託宣をあたえる。それゆえ、地元の人々にとっては、最も親しみのある神の一つとして人気を誇っている。

こうしたムッタッパン神の人気や信仰の隆盛に伴い、市場では、ムッタッパンの図像画や人形、ステッカーやカセットテープなどが販売されている。また最近では、ムッタッパンにまつわる神話を物語化したVCDや『ムッタッパン』と題する月刊誌まで発売されている。

一方、ムッタッパン儀礼の隆盛によって、神霊を担う実践者たちの生活にも変化が生じている。収入の増加はもちろんだが、以前は、年に数回儀礼を実践するだけであったが、今日では、日常的にムッタッパンを専門に担う実践者が存在し、「ムッタッパンをする人」という身分が確立しつつある。かれらは多いときにはほぼ毎日、ムッタッパンの儀礼を担っている。こうした状況は、他のテイヤムを担う実践者たちとの間で軋轢や亀裂をもたらしている。

本発表では、ムッタッパン信仰の背景にある歴史、巡礼地の様相や関連商品の流通、個人宅やローカル寺院での儀礼奉納の実態、さらには州外のケーララ出身者コミュニティで奉納される儀礼の実態を検証しながら、儀礼の活性化にともなって変容した神霊パフォーマンスの担い手たちの生活状況を照射する。そして、グローバリゼーションの進展にともない、経済、文化、政治がよりいっそう結びつきを強めている現代社会において、神霊信仰の隆盛の影で進行する、いうなれば「神霊パフォーマンスの近代化」とも呼べる、伝承や実践の変容を明らかにしていく。また、本発表は、舞台芸術活動に関する議論が中心を置いていたこれまでの文化経済学の領域において、儀礼パフォーマンスという新たな「場」についての実証的な考察を行う事で、その方法論の有益性を検討するものでもある。